

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-210	14-091	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳） Alcohol consumption at midlife and risk of stroke during 43 years of follow-up: cohort and twin analyses. 中年期における飲酒量と43年の追跡期間における脳卒中発症との関連：双子コホート研究		
執筆者 Kadlecová P, Andel R, Mikulík R, Handing EP, Pedersen NL.		
掲載誌 Stroke. 2015 Mar;46(3):627-33. doi: 10.1161/STROKEAHA.114.006724.		
キーワード	PMID	
飲酒量、脳卒中発症、双子、前向きコホート研究	25634001	
要 旨 目的： 飲酒は脳卒中の危険因子であることが示されているが、中年期における飲酒が老年期の脳卒中発症に及ぼす影響はあまり知られていない。そこで、 Swedish Twin Registry の対象者を43年間追跡した前向きコホート研究の成績を用いて、中年期における飲酒量と脳卒中発症との関連を検討した。		
方法： 一般住民における双子を対象とした Swedish Twin Registry のうち、1886-1925年に生まれ、60歳以下の時の飲酒情報のある11,644名を本研究の対象とした。中年期における飲酒量と脳卒中発症との関連をCox比例ハザードモデルで検討した。		
結果： 一日0.5基準飲酒量未満の少量飲酒者に比べ、2基準飲酒量以上の多量飲酒者における脳卒中発症リスクは1.34倍と有意に上昇していた($p=0.02$)。非飲酒者における脳卒中発症リスクも1.11倍と高い傾向にあった($p=0.08$)。非飲酒者では加齢とともに脳卒中発症リスクが上昇したが、多量飲酒者では加齢とともに減少する傾向にあった。中年期における多量飲酒は、75歳までにおける脳卒中リスク上昇と強く関連していた。一卵性双子における検討では、多量飲酒が脳卒中発症までの時間を5年間短縮していた。		
結論： 中年期における多量飲酒は、75歳までに発症する脳卒中の主要な危険因子であり、脳卒中発症までの時間を5年間短縮させる可能性が示された。中年期における飲酒量が脳卒中発症に及ぼす影響は、年齢により異なっていた。		